備をきびしくし、

『アッスリアの軍勢がいくら多くても恐れるな。味方には神様がついておいでになるぞ。』

と兵士たちをはげまし、さあやつて來い、目にもの見せてくれるぞと待てゐました。

アッスリア兵は案の定せめてきました。そしてエルサレムのまはりをひしひしと取圍み、石垣の上にのぼつて、エルサレムの民にむかひ、大聲でのののしりました。

『汝等アッスリアの大王の御言葉をきけ。汝等はヒゼキヤに欺されるな。ヒゼキヤは汝等を救ふことはできないぞ。ヒゼキヤは汝等に、エホバがきつと救つて下さるから心配するなといふだらう。だめだだめだ。どこの國の神だつてアッスリアの大王にかなふものはないぞ。ハマテの神だつて、アルパデ

の神だつて、その外どこの神だつてアッスリア王の手から、民を救ひだしたものがあるかい。エホバだつて左樣だ。そんなあてのない者をたのみにせずに降參しろ。さうすれば橄欖や無花果や、葡萄のたくさんあるよい國へつれて行つてやるぞ。』

とさんざんに惡口をいひ、またアッスリマの王からヒゼキヤ王に使をだし、

『汝はエルサレムはアッスリア王の手には落ちないと言て神樣をたのんでゐるが、その神樣にだまされるな。汝はアッスリアの王が、方々の國々にしたことをよく知てゐるだらう。どこの國の神だつてアッスリアの王をふせぐことはできないぞ。』

と手紙をかいておくりました。ヒゼキヤはその手紙をよんで、大さう怒り、エホバの宮に行てその手紙を律法の櫃の前にひろげ、

『イスラエルの神エホバよ、世の國々の中に、ただ汝ばかりが神樣でおいで

なさいます。エホバよ耳を傾けてきゝ、目をひらいて見、セナケリブが活ける神をそしる言葉をきいて下さい。神様、ほんたうにアッスリアの王は世の國々を滅ぼし、その神々を火に投げいれて燒きました。しかしそれは神ではなくて人の作つた木や石の像だからでございます。神様どうか此の民をすくひだし、汝のみまことの神にましますことを知らせて下さいませ。』

ときごころをこめて祈りました。その時名だかい預言者イザヤは神様の仰をうけ、

『アッスリアの軍勢を恐れるな、汝の祈はきき屆けられた。』

とヒゼキヤに告げました。その夜の中に、神様の使がアッスリア軍の陣中をへめぐり、片端からアッスリア軍をうち殺し、十八萬五千人の兵士が一晩のうちに死んでしまひましたので、アッスリア王はびつくりして、

『險呑々々、こんな所にうかうかしてはゐられぬ。』

と大いそぎで陣をはらひ、さう〳〵國へかへつてしまひました。

＊　＊　＊　＊

ヒゼキヤのやうなよい王がつゞいて位につけばユダ王國は幸福でしたらうが、ヒゼキヤ王が死んだ後位についた其の子マナセは、父ヒゼキヤとは打てかはつた惡い王で、神様をないがしろにし、偶像につかへ、民をみちびいて惡いことをさせました。マナセの後に六人の王がありましたがどれもこれも惡い王でした。神様はエレミヤ、ゼバニヤ、ハバクク其外の預言者をおこしユダの民の悔改をおすすめになりましたが、民は少しも預言者のいふことをきかず、却てその人々を苦しめ、ますます惡い事をつづけましたので、神様はユダの民をも敵國の手におわたしになりました。

その頃バビロンといふ強い國が起り、あたりの國々をせめ亡ぼして大さう勢威をふるひましたが、ユダの王ゼデキヤの時、バビロンの王ネブカドネザ

ルは大軍をひきゐてエルサレムを圍み、たうとうこれを陷れ、ゼデキヤ王を捕へ、目をぬきだして牢におしこめ、エルエレムの宮をはじめ、美しい建物をことごとく燒き、石垣をくづし宮にあつた契約の櫃をはじめとし神樣を祀る器物を分捕てバビロンへ持てゆき、またユダの民をことごとく捕へてバビロンにつれてゆき奴隷にして使ひました。ダビデ王が位についてから三百八十八年でユダ王國は亡びました。

第五十章　ネブカドネザルの金像

（詩篇百三十七篇。但以理書第三章）

すみ馴れた故郷をはなれて遠い外國にとらはれとなり敵國の民のためにお使はれるやうになつたユダヤ人たちはどんなに悲しかつたことでせう。故郷にゐた時は、神樣の惠のゆたかなのにつけ上つて、神樣をわすれてゐた人

たちも、とらはれの身になつてはかへつて自分の罪を悔い、神樣にすがるやうになりました。その人たちは、バビロン川のほとりにすはり、シオンの丘をおもひだして涙をながしてゐますと、ゆききの敵國人がそれを見て、

『シオンの歌をひとつ歌つて聞かせないか。』

といひました。その人たちは手に琴をもつてゐたからです。けれども人々は歌ひませんでした。どうして敵國の人をなぐさめ喜ばすために神樣の歌をうたへませう。

『われら外邦にありていかでエホバの歌をうたはんや。』

と言て、その琴を柳の枝にかけ、たがひに手をとつて泣きました。

私はこのとらはれ人の中で大さう感心な人のことをお話しようと思ひます。

ある時バビロンの王ネブカドネザルは、高さが百尺あまりあるすてきもなく大きい金の偶像をこしらへました。その偶像ができ上りますと、その除幕式

だといふのでバビロン中の役人をことごとくよびあつめ、喇叭、簫、琵琶、琴などでさまざまな音樂を奏し、その像を拜ませ、もしも拜まぬものがあれば火の中に投げ込んで殺すといふ命令をだしました。

この時多勢の役人の中に、シャデラク、メシャク、アベデネゴといふ三人のユダヤ人がありました。此の三人の者は大さう學問があり、手腕のある人でしたから、引き上げられてバビロンの役人となつたのですが、もともと信仰のあつい人でしたから、いくら王様の命令でも良心にやましいことはできないといふので、外の役人が皆頭を下げてその金像ををがんでゐるのに、平氣な顔で頭をあげて見てゐました。

そこでバビロンの人たちはその事を王につげましたので、ネブカドネザル王は大さう怒り、三人の者をよびだし、

『これこれ、其方共は朕の立てた金像を拜まぬといふのは故意とやつたことか。それとも朕の命令をきかなかつたのか。此の像を拜まぬ者は誰であれ、皆火の燃えてゐる爐の中に投げ込む法律であるぞ。』

と叱りつけますと、シャデラク、メシャク、アベデネゴの三人はとんと平氣な顔で、

『陛下よ、この事については御返事をする必要はありませぬ。神様の思召にかなへば、神様は私共をその火の燃える爐の中から私共を救ひだして下さるでせうし、もしまた救ひだして下さらなくても、私共は決してこの像を拜むことは出來ませぬ。』

ときつぱり答へました。さあ王様は怒つたの怒らないのではありません、

『怪しからぬ者どもだ。直に燒き殺してしまへ。火を平常より七倍强くして燒き殺せ。』

といひつけましたので、臣下たちははッと畏まつて、爐の火をうんと焚きつ

け、暑くてそばへもよれぬほどにし、シャデラク、メシャク、アベデネゴをひっつかまへて、縄でしばりあげえッさえッさとかついで行て、その中に投げこみましたが、あまり火がつよいので、かついで行た人は火傷をして死んでしまつた程でした。

王はジッと爐の中を見てゐますと、ふしぎではありませんか、シャデラク、メシャク、アベデネゴの三人は、爐に入ると手足をしばつてあつた縄がばらばらとけ、さかんにもえてゐる火の中を、平氣であるいて居り、三人のそばには、神の子とも思はれる、光り輝く姿をした人が一緒にあるいてゐました。王はびつくりして立上り、大臣たちにむかひ、

『今三人の者を縛つて火に投げ込んだに違ひないか。』

と問ひますと、

『仰の通りでございます。』

と答へました。王はいよいよ驚いて、

『あの三人は火に燒けないぞ、そして縄がとけて火の中をあるいてゐる。おまけに神様のやうな姿をした者が一緒にゐるぞ。さてさて怖しいことだ。』

といひながら、爐に近より、大聲をあげ、

『シャデラク、メシャク、アベデネゴよ、出て來い。』

とよびますと、三人の者はすぐ火の中から出てきました。王をはじめ人々はふしぎに思つて三人をとりまきその身體を見ますと、頭髪も着物も少しも燒けず、きな臭いにほひすらしませんでした。王はますますおどろき、

『シャデラク、メシャク、アベデネゴの神はほむべきかな、彼はその使をおくつて三人の者をお救ひになつた。そしてまた三人の者のその神を拜み、外の神に仕へまいとして王の命をもきかず、生命をもすてやうとしたのは實に感ずべきものである。されば我が國民の中、今から後シャデラク、メシャク、

アベデネゴの神を惡くいふ者があれば、その者は死刑にし、その家は壞すことを命令する。』

と申渡しました。そして三人の者は位をすすめられて、ながく王に仕へました。

第五十一章　壁の文字、ダニエルと獅子

（但以理書第五章、第六章）

バビロンに擄はれて行たユダヤ人の中にダニエルといふ人がありました。この人は幼い時から大さう賢くありましたので、選び出されてネブカドネザル王の左右につかへ、バビロニアの學問をまなびましたが、年長けるにしたがひその智慧と知識は世にならぶものなく、さまざまの異象と夢を解くことに長じ、ひろいバビロンにもたれ一人此人にこえる人がありませんので、ネ

ブカドネザル王は大さうダニエルを敬ひ、バビロンの凡ての學者の長としました。

さてネブカドネザルの孫にベルシャザルといふ人がありました。ベルシャザルは至つて傲慢な惡い王でしたが、ある日多勢の臣下をあつめて酒宴をもよほし、金や、銀や、銅や、鐵や、木や、石でこしらへたさまざまな偶像をならべてそれをまつり、ネブカドネザルがエルサレムの宮から持てきた、神様を祀る器をもちだして、勿體なくもそれで酒を飲み、歌をうたつてさはいでゐました。その時いきなり大きな手がひよッくりと室の中にあらはれ、王のすはつてゐる前の壁に何かわけのわからぬ字をかいて、そのまますッと消えてゆきました。

さあベルシャザルのびつくりしたことと言たらありません。身體ぢうがたがたとふるえ、酒宴も何もそつちのけですぐに學者や卜者をよびあつめ、

『この字は何といふ字で、どういふ意味があるのだ。誰でもそれが分つた者は三番目の知事にするぞ。』

といひました。學者たちは皆首をひねつて考へましたが。だれ一人その字の讀めるものがありません。王は心配で顏も眞蒼になり、頭をかかへて考へ込んでしまひました。すると王太后がそれをきいて酒宴の室に入り、

『そんなに心配することはありませぬ。ネブカドネザル王の時から大さう智慧のあるので名だかいダニエルといふユダヤ人があります。その人は神樣の靈のやどつてゐる人で、何でも其人にきいて分らぬとはないといふ事です。それを呼びだしてたづねて御覽なさい。』

といひますので、王はすぐにダニエルをよびにやにました。ダニエルは呼びだされて王の前に出ますと、王は

『先王の時から智慧のあるので名高いダニエルといふのは其方か、此の壁に

かいてある文字は何といふ文字で、どういふ意味かとき明してくれよ。』

といひます。ダニエルは壁のそばによつてその文字を見ましたが、直に王にむかひ、

『解りました。これは「數へたり、秤れり、分たれたり」といふ字です。その意味はどういふのかといひますと、天の神樣がネブカドネザル王に、國と權力と榮光をお與へになりました爲、世界の國々がことごとくネブカドネザル王の前にひれ伏すやうになりましたが、その後は神樣のおかげでさうなつたことを忘れ、傲り、慢ぶりなされたためその罰をお受けになつて大さうお苦しみになつたことがありました。然るに陛下はその事を知ておいでになるにもかゝはらず、少しも神樣を畏れず、却て金や石の偶像につかへ、神樣の宮の器をもつて酒を飲み自分と自分の臣下をたのしませるやうなことをなさいます。そのために神樣の前から手がでてきてこの文字をかいたのでござい

ます。そして初めの「數へたり」といふのは、神様が陛下の治世をかぞへてもう數へ切てしまひなされたといふ意味。「秤れり」といふのは神様が陛下の貫目をお秤りになつて、陛下が王におなりになるだけの貫目の足らないことがあらはれたといふ意味。それから「分たれたり」といふのは陛下の國が分たれて、メデヤとペルシャに與へられるといふ意味でございます。』

とすらすらとのべましたので、ベルシャザル王はいよいよおどろきました。しかしまさかダニエルの言葉が、二日や三日の中に本當にならうとは、誰も思ひませんでしたが、二日か三日どころか、ベルシャザルはその晩の中に殺され、バビロン王國はメデヤとペルシャのものになつてしまひました。

ベルシャザルの後にバビロンを治めたのはメデヤの王ダリヨスです。ダリヨスはダニエルの大さう賢い人なのを見て重く用ひ、國中の知事の上に立つ三人の大臣の一人にしましたが、何事につけてもダニエルは外の大臣にたち

まさつてゐて、とても比べものになりませんので、つひにはダニエルだけをあげて、全國を治めさせやうとしました。外の大臣たちはこの事をさとつてダニエルを嫉み、どうかしてダニエルとダリヨス王とを爭はせやうと思ひ、ダニエルのあらをさがしました。しかしダニエルは忠義でまた仕事に熱心な人でしたから、少しも惡いところがありませんので、惡い大臣たちは困つてしまひ、とう〳〵大へんいけない計略を考へだしました。その計略といふのはかうです。

ある日惡い大臣と惡い知事たちは一緒に王様の前にゆき、

『今日から三十日の間、國中でみな陛下にだけお願ひをし、その外の人にでも神様にでも、少しでも願ひ事をするものがあればその人は獅子に食べさせて殺すといふことにきめたうございます。これは國中の大臣、將軍知事たちが皆賛成でございますから、どうかさういふ命令をお出し下さいませ。』

とお願ひしました。これはダニエルが平生神様に忠義な人で、毎日缺かさずお祈をすることを此の大臣たちが知てゐましたので、かういふ布令をだしたらダニエルを罪に落せるだらうと思つて計つたことですが、王様はそんな事とは氣付かず、大臣等のいふやうにその命令をだしました。

ダニエルはそれまで、自分の家のエルサレムの方にむいた窓で、日に三度づゝ膝をかゞめてお祈をすることにしてゐましたので、こんな命令が出たつて止める筈はありません。相變らずお祈りをしてゐました。惡い大臣たちは兼てはかつたことですから、ちやんとダニエルのお祈りをしてゐるところをつきとめ、王様の前にでて、

『ダニエルといふ奴は不埒な奴でございます。三十日の間は、陛下より外の者に願事をしてはならぬと御布令が出てゐますのに、日に三度づゝエルサレムの方へむいて祈をして居ます。どうか御命令どほりダニエルを獅子に食べ

させなさいますやうに。』

といひました。ダリヨス王はさてはダニエルを陷れるための計策だつたかと悟り、どうかしてダニエルを助けようと、いろいろ心をなやましましたが、どうもいゝ考がうかびません。夕方になるまで頻に考へてゐますと、大臣たちはまたやつてきて、

『ダニエルはどう致しませう。昔からメデヤとペルシヤの法令で、王様の御命令になつたことはかへることの出來ない定めでございます。』

といひます。王は仕方なしにダニエルを縛つて來させ、

『ダニエルよ、どうか汝の仕へる神様が汝を救ひたまふやうに。』

と言て、罪人を食べさせるために飼つてある、獅子のゐる窟になげいれさせました。しかし王は其晩は心配で心配で御飯も咽喉にとほらず、夜どほし少しも眠ることができません。夜のあけるのを待ちかねてとびおき、獅子の窟

にゆき、かなしげな聲をあげて、

『ダニエルよ、汝の仕へる神様が汝を救つて下さつたか。』

とよびますと、中からダニエルの聲がして、

『陛下御安心下さい。私の仕へる神様が使をおくつて獅子の口をふさいで下さいました。私はちやんと生きて居ります。』

と答へました。王のよろこびと言たら言葉につくされません、すぐに役人どもをよび集め、窟の口をあけてダニエルを出させましたが、ダニエルは指一本も食はれてゐませんでした。

そこで王はダニエルを讒言した者どもを縛つて來させ、その窟になげこみますと、獅子はたちまち片端からその者どもを食ひ殺して、骨も殘らず食べてしまひました。

ダリヨス王はこの事から後神様を信じ、全國に布令をだして、ダニエルの

信ずる神を畏れ敬ふべきことを命じました。

第五十二章　エルサレムの再建

（以士喇書第一章—第九章）

ユダ王國の亡びる前に、預言者エレミヤはユダの將來を預言しました。それは、ユダの國民は神様にそむいて罪ををかしてゐる爲、神様はアツスリア人をよびよせてユダを亡させなさるが、その後七十年たつて、ユダヤ人はふたたびエルサレムに歸つてくるといふことです。はたして七十年の後、ペルシヤ王クロスの世に神様はクロスの心をうごかして、次のやうな命令を出させなさいました。

『ペルシヤ王クロス言ふ。天の神エホバ、地の上の諸國を我に賜ひ、その家をユダのエルサレムに建てることを御命令になつた。さればユダの民たるも

のは皆エルサレムに行き、エホバ神の宮を建てよ。その人々の隣人は皆金、銀、貨財などを與へて助けよ。』

ユダヤ人たちのよろこびはどんなだつたでせう。みんな大よろこびでエルサレムに歸り、力をあはせてはたらき、石を切り、木を伐て、神様の宮をたてはじめました。その基礎をすえる祝の時、人々は喇叭や鈸をとり、歌をうたつて神様を讃美しましたが、老人の中には、昔ネブカドネザルの爲に毀された、ソロモンの造つた宮を見た人もありますので、昔を思ひだして聲をあげて泣きました。昔の國民が罪に沈んでゐた有様、それから起つた亡國のかなしみ、長い間他國にさすらつた苦しみを考へ、今神の宮をふたゝび建てるのを見て、それらの老人の心は喜びと悲みが入り混つて、何とも言はれぬ心地でありました。

長い月日——二十年ものあひだかゝつて新しい宮はできました。それはソ

ロモンの建てた宮のやうに美しい大きな宮ではありませんが、それでもなかなか立派で宮でした。つづいてエルサレムの町ももとのやうに、きづき直されました。

その頃エズラといふえらい人があつて、ユダヤ人の法律をさだめ、よい政治をおこなひ、ユダヤ人をみちびきました。ユダヤ人たちは、先祖たちの行たわるい行をすつかりやめ、もつぱらエホバ神に仕へました。しかし昔のユダ王國はできませんでした。ユダヤはペルシヤ、エジプト、シリアなどの屬國となつて、ユダヤ人の知事や王が國を治めてゐました。途中で一時獨立しかけたこともありましたが、ほんの暫くのあひだで、またローマの屬國となりました。これで舊約時代の歴史はおしまひです。

神様は御自分の口から、或はさまざまな預言者の口をとほして、ある事をユダヤ人にお約束なさいました。それは何でせう。

萬國の民を救ふべきえらい王、救ひの主が、アブラハムの裔、ダビデの子孫から出るといふ事です。

アブラハムもその事をききました。イザヤ、エレミヤ其外の預言者はいく度も〳〵ビデもその事をききました。イスラエルもその事をききました。ダその事を預言しました。信仰のあついユダヤ人は、その事を信じて、救ひの主の世に出で給ふのを待ち望んでゐました。

そして萬國の救ひの主、ユダヤ人の王はお生れになりました。申すまでもなく、ダビデの村の馬槽に、處女マリヤの腹から生れたまふた、神のひとり子、恩惠と榮光にみちたまへるイエス・キリストがそのお方であります。それはエルサレムの宮が再び建てられてから五百年ばかり後のことでありました。

イスラエル國民の歴史は心をいたましめる悲しいことが多くあります。しかしその中の信仰の厚い族長、士師、預言者、王等の事蹟のために、私どもはどんなによい教訓をうけることでせう。そしてまた、神様のお定めになつた時が來れば、この氣の毒なユダヤ人は、ふたたび神様のお許をうけて國をたてる時が來るであらうと思ひます。

大正七年十二月十日印刷
大正七年十二月十三日發行

【定價 壹圓五拾錢】

著作者　蘆谷重常

發行者　福永文之助
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷者　村岡平吉
横濱市太田町五丁目八十七番地

印刷所　福音印刷合資會社
横濱市山下町百〇四番地

發兌　東京市京橋區尾張町二丁目　警醒社書店
振替東京五五三番

複製許可

蘆谷重常著

新約 こども聖書

（再版）

四六判 二百五十頁
名畫十二葉
定價九拾五錢
送料八錢

聖書の本文は難解にして兒童の讀誦に不適當なり。若し聖書をして更に平易にして讀易からしめ年少兒童にも容易に讀み且つ解し得るものたらしめんには彼等が靈性の修養に資する所甚大なるべし。著者茲に見る所あり、四福音に現はれたる基督の言行の殆全部を平明なる口語に書きあらはし、最も信ずべき學說によりて其記載を正し、難解なる個所に簡單なる說明を加へ以て本書を成せり。

加ふるに本書は全體を五十三章に分ち略同一の分量を各章に配分し毎週一章を課して一年間に四福音書記事の全部に通ずるを得べきやう編纂せるを以て日曜學校及家庭禮拜等に用ひて最適當なり。卷頭には鮮明美麗なる名畫十二葉及地圖を挿み裝幀また美麗なり。

蘆谷蘆村著
本田庄太郎畫
伯
繪と裝幀

お伽物語 天國の方へ

目次

ま	ぼろしの園
新	らしい朝
天	國の花
少	女と鴎
駒	鳥物語
夏	草物語
蝦	蟇と薔薇
歌	本とジヤムと
農	場の出來事
お	月樣の話
子	猫と少女
太	郎と風の神

評批

たいへん美はしい話が集められてある。聖句をその主意としたものが多い。多くの子供さんがたがきつと好く本である。（開拓者）

お伽劇と、お伽噺と十二篇を集め、極彩色の畫數葉をはさんだ美はしい本である。お伽劇「まぼろしの園」「新らしい朝」等は著者の清新な構想を示すもので日曜學校の上級生などにクリスマス餘興として演ぜしむれば、隨分興味ふかきものゝ樣に思はれる。其他お伽劇も小品も新春の讀物として少年少女を喜ばせるに十分であらう。（新人）

コ1148

藤川淡水著　お伽聖書　定價五拾錢　郵税六錢

同　讃美歌お伽噺　定價四拾錢　郵税六錢

田村直臣著　幼年教育百話　定價壹圓四拾錢　郵税八錢

松居松葉著　お伽草紙　定價參拾錢　郵税四錢

後藤春樹著　蝶々太郎さん　定價拾貳錢　郵税貳錢

成瀨正弘編　四洋古今名訓逸話集　定價四拾錢　郵税四錢

新島善直著　クリスマス物語　定價四拾錢　郵税四錢

毛利薫譯　柊山のクリスマス　定價貳拾錢　郵税貳錢

終